

はじめに

環境というとても身近な存在が、これまでになく深刻な問題となって現れています。科学技術が発展するのと同時に、人間のおこないが引き起こす問題は、ますます複雑なものとなっています。私たちは、環境にかかわる問題が複雑になっているにもかかわらず、問題について考えることをしなくなってきているように思います。問題が複雑になっていて、それについて考えること自体が難しくなっているのかもしれませんが。それどころか、問題について無視してしまい、無関心になっているといえるかもしれません。

こうして今日、環境にかかわる問題について、「他の誰かが考えるから私は考えなくてもいい」というのでは、環境問題はますます悪化していくことでしょう。そうではなくて、私たち自らが考えること、そして行動を起こしていくことが、ますます重要になってきています。私たちにとっては、環境にかかわる問題とは、私たち自身の問題なのだと捉え直すことが大切です。環境にかかわる問題がいくら複雑になっていったとしても、原因となっている私たち一人ひとりが、その問題に向き合い、必要な知識を学びながら考え行動していくことしかありません。そうすることによって、環境問題の解決への取り組みを進めることが基本ではないでしょうか。

本書では、私たちが環境問題を自分たちの問題として捉えるためには、自分自身の感性や関心に立脚して問題を考えていくことが大事になると考えています。そうした考え方や態度を、レイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」という思想と行動から学ぶことができます。このねらいのもと、同志社大学政策学部では、「政策トピックス レイチェル・カーソンに学ぶ現代環境論」(レイチェル・カーソン日本協会関西フォーラムによる寄付講座)という授業が行われました。本書『レイチェル・カーソンに学ぶ現代環境論』は、この授業をもとに、カーソンのアイデアに学び、環境問題を私たち自身の問題として捉え、自分自身の感性や関心を大切にしながら考え行動を起こすきっかけになることをめざして編まれました。

本書が想定する読者としては、大学での勉強の仕方もよくわからない、大学に入学したばかりの若者世代、環境問題をもう一度基本のところから学び直したいと思っている学生や社会人、自然環境やその問題に関心を持っているが初めて学ぶ人（初学者）です。加えて、カーソンの問題提起について専門的に学んでいく入り口としていただいたり、これまでの関心をさらに広げたり、知識をさらに深めたり、これまでの知識や経験をふまえ、学び直していくのに活用していただければと願っています。

まずはカーソンのことを知っていただき、環境やその問題への思いを深めてからさまざまな問題について学んでいただくのもよいと思います。環境についての原理的な考え方についての関心や環境政策への関心、あるいは身近な食生活への関心など、読者の方それぞれに関心をお持ちのことと思います。それぞれのご関心に近い章から読みながら、他の章へと視野を広げて読み進めていただくのもよいかもしれません。本書には、受講した学生が講義をどのように受け取ったのかを示した章もあります。また、受講した学生諸氏や参加されたカーソン協会の方々など、たくさんの方にいただいた感想の一部がコラムにまとめられています。そこから読んでいただいても興味深いと思います。

本書は4部からなり、第1部はカーソンの生涯や思いについて学び、教育実践をデザインすることを中心としています。第2部では、実際の教育実践でゲストスピーカーとして講義を担当していただいた方々に執筆していただきました。ゲストスピーカーを務めてくださったのは、実際の環境問題に深く関与しておられる研究者の方々や、行政・企業・NPOなどに所属する実務家の方々です。第3部では、それぞれの分野で活躍される姿が、現代のレイチェル・カーソンと呼ぶに相応しい方々に、実際に講義を担当しお話しいただいたものです。第4部は、実際に同志社大学政策学部で行われた教育実践の結果および課題について述べています。

本書の編者は嘉田由紀子・新川達郎・村上紗央里の3人ですが、「はじめに」、そして第1章・第2章・第12章・第13章を執筆した村上がこの教育実践の企画・コーディネートを務め、実際の実践をどのようにするかを考え、本書の共著者やレイチェル・カーソン日本協会関西フォーラムの会員など多くの方々の協力を得ながら授業を進めました。

最後に、本書がなぜこのような構成をとっているのかについて、編者の想いととも示しておきたいと思います。

本書は、多様な分野、多様な担い手によって編まれています。その意図するところは、環境にかかわる問題は多様なアプローチから学ぶ必要があると考えられているからです。環境問題は、私たち一人ひとりによって引き起こされています。その解決には、私たち一人ひとりが手をとりあい、協働していくことが求められています。それは、人と環境との関係だけでなく、人と人との「いい関係づくり」が求められているということが出来ます。

本書では、著者と読み手との対話を通じて、この点を理解してほしいと願っています。また、本書の教育実践の受講生と同じく、本書を読みながら対話を交わすというかたちで活用していただければ幸いです。

編者の一人として 村上 紗央里